

指導資料

鹿児島県総合教育センター

特殊教育 第128号

- 小, 中, 高, 盲・聾・養護学校対象 -

平成14年11月発行

特別な教育的支援を必要とする児童生徒の理解と指導 - WISC - 知能検査を通して -

学習障害(LD)児や注意欠陥/多動性障害(ADHD)児等のいわゆる特別な教育的支援を必要とする児童生徒(以下子ども)の指導に当たっては,心理特性や学力の状況,行動特性,運動能力などの実態を的確に把握し,その実態に応じた指導内容・方法を用意することが基本となる。これらの実態把握項目のうち,心理特性については,各種検査の実施が必要となるため,実態把握が思うように進まないという現状がある。

しかし,学習障害(LD)児等が示す学習上のつまずきは,特異な認知(情報処理)過程に起因しており,その心理特性を的確に把握し,結果を支援に生かしていくことが重要になる。

そこで,本稿では特別な教育的支援を必要とする子どもの認知能力を把握するために必要な,個別式知能検査の一つである,WISC - 知能検査に視点を当て,検査の特徴や結果の考察の仕方,そこから得られる支援上の手掛かりについて事例を含めながら述べる。

1 実態把握から支援へ

特別な教育的支援を必要とする子どもが示す学習上のつまずきの背景を明らかにす

るためには,多面的で総合的な実態把握が必要となる。

図1に示すように,支援上の手掛かりを得るためには,学習上の困難さに目を向けながら,子どもについての情報を様々な角度から収集していくことが大切である。その中で,WISC - 等の検査は,子どもの認知特性に光を当てる上で重要な情報源となる。

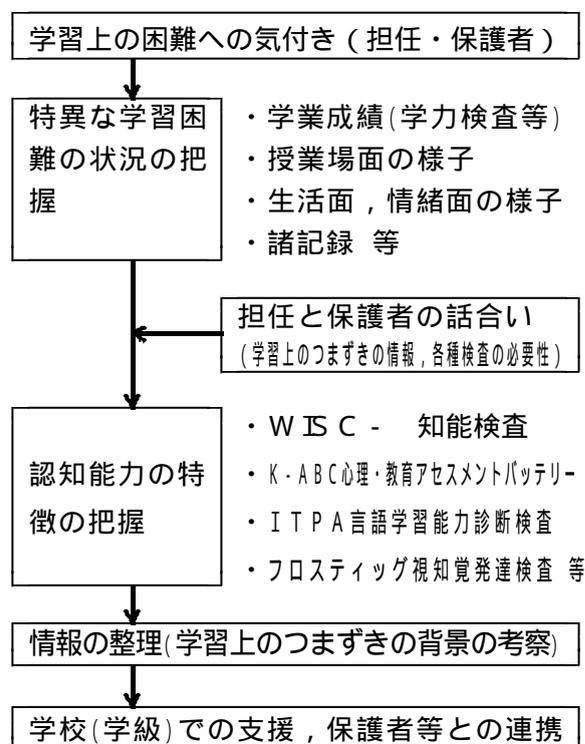


図1 実態把握から支援への流れ

2 WISC - 知能検査の特徴

特別な教育的支援を必要とする子どもの示す学習上のつまずきは、情報を受け止め、整理し、関係付け、表出する過程のどこかが十分に機能できていないことに原因があると考えられる。

本検査は、個別式知能検査であり、全般的な知的発達水準（IQ）を測定できる。また、認知（情報処理）過程の発達の特徴（偏り）を明らかにし、子どもの支援の方法を導き出せることに大きな特徴がある。いわゆる個人内差に着目することができ、個々人において「得意な部分」と「不得意な部分」を把握できるわけである。

検査の構成は、図2のようになっており、大きく分けて、耳から情報を受け取って言葉によって応答する言語性検査と、目から情報を受け取って動作によって応答する動作性検査に分けられる。また、群指数（後述）、下位検査項目についても分析、解釈が可能で、それぞれで測ることができる能力は表1、2のとおりである。なお、いずれのIQ、群指数も平均は100になる。

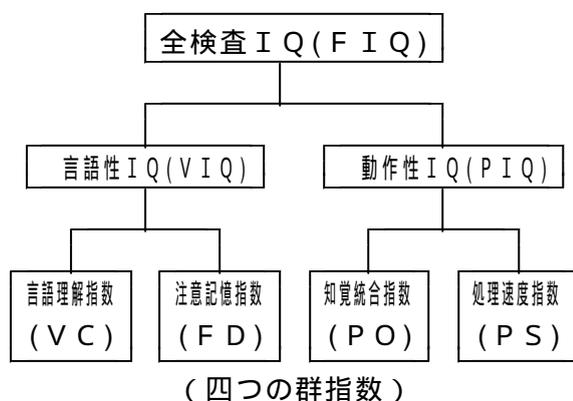


図2 WISC - で測定される能力の構成

表1 各下位検査から測定される能力

	下位検査	能力
言語性検査	知識類似	一般的事実についての知識量 論理的なカテゴリー的思考力
	算数	計算力
	単語	言語発達水準 単語に関する知識
	理解	実際の知識を表現する力 過去の経験や知識 既知の事実を正確に評価する力
	数唱	聴覚的短期記憶
動作性検査	絵画完成	視覚刺激に素早く反応する力 視覚的短期記憶
	符号	指示に従う力 動作の機敏さ 事務処理の速度と正確さ 視覚的短期記憶
	絵画配列	結果を予測する力 時間的な 順序の認識 時間の概念
	積木模様	全体を部分に分解する力 非言語的概念を形成する力 自分が考案した空間構想に対 象を位置付ける力
	組合せ	感覚運動のフィードバックを 利用する能力 思考の柔軟性
	記号探し 迷路	視覚的探索の速さ 視覚的パターンをたどる力 見通す能力

表2 下位検査の組合せから測定される能力

群	組合せ	能力
言語理解	知識 類似 単語 理解	事実や思考内容、観念 などを言葉で理解したり、 表現したりする能力
知覚統合	絵画完成 絵画配列 積木模様 組合せ	見たり聞いたりした情報 の相互関係を認識する 能力及び各要素を一 つにまとめていく能力
注意記憶	算数 数唱	数を扱う能力 注意集中 短期記憶の能力
処理速度	符号 記号探し	正しく早く処理する 能力

3 WISC - 知能検査結果の解釈, 考察

本検査結果の解釈, 考察に当たっては, 以下のような手順が考えられる。

(1) 全般的な知的発達水準の把握

本検査では, 偏差IQ (単一の年齢群の中だけで個々人が取得した得点と比較したIQ) の考えを採用しており, 全検査IQ (FIQ)で同年齢集団における相対的位置を把握できる。

ここでは, 全般的な知的発達の遅れがないかどうかの確認がポイントとなる。

(2) 言語性IQと動作性IQの把握, 比較

言語性IQと動作性IQの二つの数値から, 個人内差 (発達の偏り) をみることができ, VIQは聴覚的な情報処理能力, PIQは視覚的な情報処理能力をみることができ, 二つの数値の間に大きな差 (有意差については検査マニュアルを参照) があれば, 能力に偏りがあると考えられる。

(3) 四つの群指数の把握, 比較

群指数は, 下位検査の中で似たような性質をもつ項目を集め, 評価点の合計を換算表から読み取る指標である。この群指数間の差に着目することで, 更に細かな認知特性をとらえることができる。例えば, 知覚統合の指数が高ければ, 知覚した情報を関係付けたりまとめたりする能力を得意としていることが考えられる。

(4) プロフィールの考察

下位検査評価点のプロフィールをみると, 評価点間にも個人内差があることが分かる。評価点平均から大きな落ち込みがあるような項目については, 学習上の

つまずきに関与している可能性が高い。反対に相対的に高い項目は, 優位, 得意な分野を示している。

4 考察から支援への活用の実際

ここでは, WISC - の検査結果を基に, 認知能力に関する特性を考察し, 支援へ結び付けるまでの活用の実際を事例を通して述べる。

【事例】

- 通常の学級に在籍 小学校第5学年男子
- 主な学習上のつまずき

書くことに苦手意識があり, 書字が乱雑で形や大きさが不規則になる。絵画等にも構成能力の未発達さがみられる。

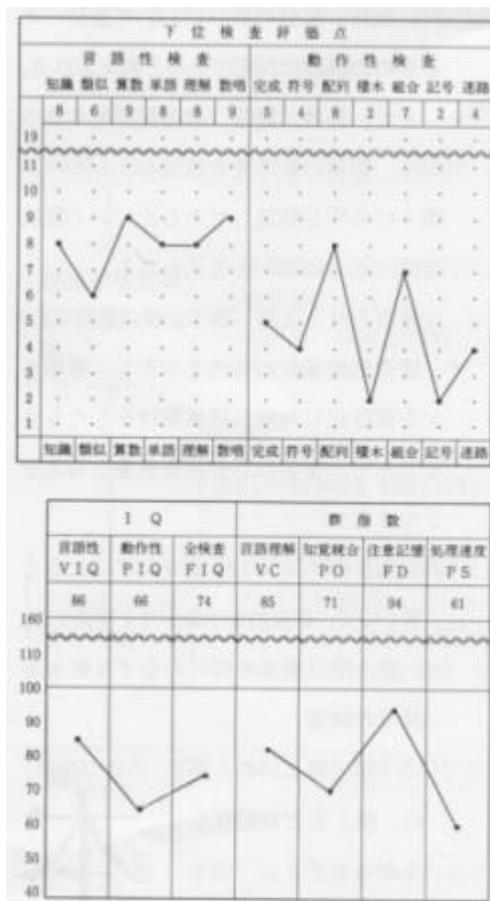


図3 WISC - 知能検査の結果

(1) 結果の解釈，考察

ア 全検査IQは74であり，知的には，いわゆる境界線段階とみることができる。

イ 言語性IQの高さ（動作性IQとの有意差）から，聴覚処理が優位である。

ウ 群指数では，言語理解が高く，言葉によって情報を受け止め判断し，言葉で表出する能力が高い。また，注意記憶が高く，問題に注意を向け，受け取った情報を記憶する能力は高いと考えられる。しかし，処理速度の低さから，単純に繰り返し書く作業は不得意のようである。

エ 積木模様，記号探しが低いことから，視覚的に全体を把握することが難しいようである。しかし，組合せは高いことから，全体と部分の構成において意味のあるものの構成は得意であると考えられる。

また，算数，数唱，絵画配列等の高さから，物事の順序性を重視し，一つ一つ順々に分析し処理してとらえていく継次処理の能力は高いと考えられる。

(2) 支援の方針と実際(書字に視点を当てて)

ア 聴覚処理優位の特性を生かし，筆順などを言語化したり，言葉掛けをしたりすることで，文字の形や大きさをとらえやすくする。

(例) 大きなマスに1字ずつ丁寧に大きく書く中で，聴覚的な手掛かりを提供する。

(ア) 書き順に数字を付けたなぞり書き用紙での練習

(イ) 「横，縦，斜め，斜め，横」など，言語化しながらのなぞり，一部なぞり，視写への発展



(ウ) うまく形が整えられないひらがな等については，「くるっと」などの言葉掛けとともに書く練習の継続

イ なぞり書きから段階的に視写に移行したり，書くマスを工夫したりして，部分から全体をとらえやすくするような，順序性を重視した手だてを行う。

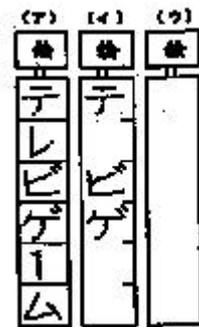
(例) 語句や文章については，興味・関心の高い対象を選択し，絵を見て内容を書くなどイメージしやすくする。

(ア) マスの中でのなぞり
一部なぞり 視写

(イ) 区切りの目印を基に
なぞり 一部 視写

(ウ) 目印なしの枠の中で
なぞり 一部 視写

(エ) 長い文章等への発展



このように，本児の場合，聴覚処理や継次処理能力の高さを生かした細かな手立てを用意し，指導を継続した。その結果，書字への抵抗がなくなり，自信をもって学習に取り組む姿をみることができた。

以上，WISC - 知能検査を基に，実態把握から支援の実際までを述べてきた。ただ，更に子どもの理解を深めるためには，言語能力や視知覚能力等に関して，適切なテストバッテリー（検査の組合せ）を組んでいく必要があることが多い。総合的に把握し，子どもの「よさ」を生かしていこうとする教師の姿勢が何より重要である。

【参考文献】

上野一彦外編著 「LDの教育」 2001 日本文化科学社
「WISC - 知能検査法」 1998 日本文化科学社

(特殊教育研修室)